

村上春樹『スプートニクの恋人』論 — 教員小説の視点から —

Haruki Murakami's "Sputnik Sweetheart":
From the Perspective of Teacher Novels

津金 伽帆
Kaho TSUGANE

序論

村上春樹『スプートニクの恋人』（講談社、一九九九年四月）は、全16章で構成された「中編小説、あるいは短いめの長編小説」のカテゴリに属する作品である。『村上春樹全作品 1990～2000②』（講談社、二〇〇三年一月）に掲載されている「解題」より、本作品に関する箇所をやや長いが引用する。傍線は論者による。本稿の考察において重要な箇所に傍線を付した。以下同じ。

僕がこの『スプートニクの恋人』を書くにあたってひとつはつきりと決意していたのは、自分がこれまで採用してきた——言い換えれば武器として使用してきた——ある種の文^体に別れを告げようということだった。具体的に述べるなら、僕が決別しようとしていたのはつまり、この冒頭の文章に見られるような「比喩の氾濫」であつたのかもしれない。僕はこの『スプートニクの恋人』においては、とにかくそういう僕の文章の持ついくつかのレトリカルな特徴を、出せるだけ出し尽くしてしまおうと決意した。

また、

それからもうひとつ、僕がこの作品で試みようとしたのは、小説的視点の移動の問題だった。この作品にはもともと三人の主要人物が登場する。「ぼく」と、すみれと、ミュウである。(にんじん)について言えば、先にも述べたように、彼はあくまで一応の物語が終わったあとの settlement のための存在である。「ぼく」はもちろん語り手であり、そういう意味では基本的にこの話は、これまで僕が書いてきたのと同じような一人称の小説ということになるわけだが、僕としては今回はムービーカメラを後ろに引くみたいに、「ぼく」の視点をどんどん後ろに引いていって、「ぼく」とすみれとミュウという三人の視点をほとんど対等に、あるときには独立しあるときには有機的に絡み合いながら機能する物語を書いてみたいと思った。(中略) そのようなテクニカルな領域での挑戦を試してみようというのも、この作品を書きだすにあたって僕の設定した目標のひとつだった。

誤解を恐れずに言えば、そういうコンテクストにおいては『スプートニクの恋人』は基本的にテクニク・コンシヤスな作品であるということもできるだろう。

と述べているように、この作品の執筆にあたってなされた「比喩的氾濫」といった「レトリカルな特徴」との「決別」や「小説的視点の移動」に関する「テクニカルな領域での挑戦」に着目し、論じた先行研究が多く見受けられる。

柘植光彦『村上春樹の秘密 ゼロからわかる作品と人生』(株式会社アスキー・メディアワークス、二〇一〇年四月)の第二章「走り始めた日々―そうだ、小説を書こう」に、村上の作品のスタイルの特徴として、「都会的で軽妙な会話と、わかりやすい語り口」、「いくつかの別の話がかかるがわる出現する進行のしかた」、「何かをさがすための調査や旅行」、「現実とは別の世界、死者の世界への移行」、「自分さがしの行動と挫折、そして喪失感」などが挙げられているが、『スプートニクの恋人』も例に漏れず、その特徴に多分に当てはまる。だからこそ、『スプートニクの恋人』の執筆にあたってなされた「試み」に着目し、それらを中心とした研究がされてきたのだろう。

ただ、加藤典洋編『村上春樹 イエローページ PART2』(荒地出版社、二〇〇四年五月)の第三章「現実の新しい様相―スプートニクの恋人」で加藤氏は、「これまで自由業ないし自由度の高い職業だった主人公の職種が、『スプートニクの恋人』ではじめて小中学校の教師という地道な職種になる。ちなみに言うところ、村上自身の両親も、中学校などの国語教師だった。」と、主人公の職業に変化が見られる点を指摘している。たしかに、『スプートニクの恋人』以前の作品における主人公の職業は、文筆業(『ノルウェイの森』講談社、一九八七年九月)や、フリーライター(『ダンス・ダンス・ダンス』講談社、一九八八年一〇月)、ジャズバーの経営者(『国境の南、太陽の西』講談社、一九九二年一〇月)などが挙げられ、小中学校の教師に比べて「自由度の高い職業」に設定されていると言えよう。

また、『スプートニクの恋人』以外にも、「中国行きのスロウ・ボート」(『海』、中央公論社、一九八〇年四月)や「レーダーホー

ゼン』（『回転木馬のデッド・ヒート』（講談社、一九八五年一〇月）、
「雨の日の女#241#242」（『E』、アド・プロラーズハウス、
一九八七年一月）、『ねじまき鳥クロニクル』（新潮社、一九九四年
四月）、『海辺のカフカ』（新潮社、二〇〇二年九月）、『1Q84』
（新潮社、二〇〇九年五月）、『蟹』（『めくらやなぎと眠る女』、新
潮社、二〇〇九年一月）、『シェラザード』（『MONKEY』vol.2
SPRING 2014、株式会社スイッチ・パブリッシング、二〇一四年
二月）など、教師が登場する作品は複数確認できるものの、主人公
が教師に設定されている作品は『スポーツニクの恋人』のみである。
本稿では、これまで村上が直接言及してこなかった、また、研究
史において見過ごされてきた「小学校の教師」という主人公「ぼ
く」の職業に着目し、『スポーツニクの恋人』を教員小説として捉
えた上で考察していく。その中で、教師をめぐる村上の言説を取り
上げつつ、本作品に描かれる教師像を明らかにする。それに伴い、
「ぼく」の生徒として登場する「にんじん」に着目する必要がある、
「にんじん」がこの作品において「一応の物語が終わったあととの
settlementのための存在」として描かれた点への分析を行う。その
ことよって、本作品を教員小説として新たに位置づけることを目
指す。

一章 研究史上の問題点

序論において、主人公の職業に関する論が少ないことを示したが、
この問題については先行研究を整理したい。

杉山裕紀「村上春樹『スポーツニクの恋人』論」こちら／あち
らの問題を軸として」（『歴史文化社会論講座紀要2017』、14）、
二〇一七年二月二十八日）で杉山氏は、「ミュウ」と「すみれ」について、
両者が芸術家（ピアニスト／小説家）となるために多くを犠
牲にする人生を送ってきたという点は、看過することのでき
ない共通点である。彼女たちには人生から排除してきた様々
な可能性がある。

と述べているが、「ぼく」については、

〈ぼく〉は理想の自己、つまりすみれと「恋人同士」である自
己と、すみれに「関心を抱」かれていない現実の自己との懸
隔を常に感じている。

ここから、〈ぼく〉もミュウやすみれほど強くはないにせよ、
別様の自己への羨望を抱いてきた人物だと考えられる。〈ぼく〉
には別様の現実や自己を想像することで、現実から逃避する
習癖がある。

と分析している。「芸術家」という職業の観点から「ミュウ」と「す
みれ」の共通点を挙げている一方で、「ぼく」の分析においてその
職業性は問題とされていない。

範淑文「主人公が演じた『働く』という行為―夏目漱石『門』・
村上春樹『スポーツニクの恋人』をめぐる―」（『比較日本学教育
研究センター研究年報 第13号』、二〇一七年三月一六日）では、

すみれという主人公^(注5)は、大学を中退して小説家を目指そうとしながら、作品が一つも書けなかった。ところがある事がきっかけで作家になるのを諦め、OLになったというユニークなキャラクターである。

とした上で、

(前略) ミュウの会社への就職が決定してから、すみれがすっかり変ってしまったことは明らかであろう。就職する前は、髪に櫛も通さないし、口紅も「眉ペンシル」などの化粧品も知らず、「ブラジャーにサイズがあることさえ知らない」という、社会における女性一般の有り方や振る舞いを全く意識しない、「世間知らずな女性であった。しかし、OLになったすみれは(中略)、「クール」な感じの「ショートカット」のヘアスタイルに変り、「ネイビーブルーの半袖のワンピースの上に、薄いカーディガンを羽織る」、しかも「中くらいの高さのヒールで、黒いエナメル。ストッキングまではいている」女らしい姿に変身してしまった。更に、ヘビースモーカーだったすみれは煙草を止め、週に三回出勤し(経済的に考え「来月から週に五日間働くことにする」と「ぼく」に話す)、そのため電車に乗るように頑張っている。つまり、頭から足までの着こなしなどの外見のみならず、生活習慣、更に、人生の目標まで著しく変わったのである。

と、就職によって「女らし」さや社会性を身につけた「すみれ」の変化を指摘している。また、「ミュウ」の職業については、

男性中心というイデオロギーが容易には抜けられない日本社会では、女性が仕事場で男性と平等に働くのは容易いことではない。況してや女性が会社を経営し、しかもヨーロッパという先進国へ自ら取引に赴いたりするのは極めて異例であろう。(中略) ワインの仕入先や音楽家のスカウトなどに彼女は積極的に携わるのである。有能な女性実業家であるその姿が容易に想像できるだろう。

とある。全体を通して女性の労働について論じられていることもあり、「ぼく」をはじめ、それ以外の登場人物の職業については言及されていない。

今井清人「村上春樹の音楽VI——『スプートニクの恋人』について」〔専修総合科学研究28〕(二〇二〇年一月二〇日)には、「ミュウ」、「すみれ」の父親、「ミュウの仕事のアシスタント」としての「すみれ」の職業についての考察が示されている。「ミュウ」については、

韓国籍だが、日本で生まれ育ち、フランスの音楽院に留学。洗練された身なりをし、愛車は12気筒のジャガー。さらに、披露宴の場面でミュウ自身の口から職業が語られる。十三年前に父が残した貿易会社を引き継いだが実務は夫と弟に任せ今は個人的に築いた人脈を使ったワインとクラシック音楽の仕事に専念している。「上流」と「有能」を示す仕様書がまず出

されるわけである。

としている。たしかに「ミュウ」は作品全体を通して、「上流」かつ「有能」な気品のある女性として描かれている。「すみれ」の父親については、

すみれの父は、ハンサムな歯科医師である。異性に対する性的アピール力のある医療の専門職、人口管理に主眼を置く生命政治的文脈が優先される現代にあつて、理想的男性像のアイコンである。

とあり、「すみれ」については、

すみれはミュウの仕事のアシスタントとして働くようになる。そして封印が解かれたようにすみれの中の女性が発露されるようになる。(中略) ジャック・ケルアックにაცოგაღე、サム・ペキンパーの映画を好むワイルドな男性的パッケージにこもっていたのが、აცოგაღეの対象をミュウに移すことで洗練された女性を自己像として織り上げたのだ。

と分析されている。いずれの職業もジェンダーの視点から論じられ、就職による「すみれ」の変化も言及されている。「ぼく」については、

「ぼく」という語り手は、肉声で語る存在であるほかに、時には透明なカメラアイのような視点となったり、また時には

すみれやミュウの声を伝達するメディアとなったり、とその身体性を大きく変化させている。その一方で、語る対象となる出来事が終了した時空、その安定したメタ・レベルを確認するような(中略) 語りも挿入される。

とあり、村上の言う「小説的視点の問題」は注目されているも、「小学校の教師」という職業の観点からは論じられていない。

これまで見てきたように、「すみれ」や「ミュウ」の職業に対する先行研究はあるものの、「ぼく」の「小学校の教師」という職業性については無視されていると言つて良いだろう。これは同時に、「ぼく」が「にんじん」の万引きをめぐり、担任としてスーパーマーケットに呼び出される15章の分析が足りないことを意味する。以上を研究史上の問題点として指摘する。

二章 村上にとつての教師

「小学校の教師」という主人公の職業について考えるうえで、まずは村上と両親の関係について取り上げる必要がある。

柘植光彦『村上春樹の秘密 ゼロからわかる作品と人生』の「第一章 謎の作家―村上春樹って実在するの?」の中に、「今はかなり知られるようになったが、村上春樹の父親である村上千秋氏は、京都のお寺の息子で、自分もお坊さんだった。長く西宮市の中高一貫の進学校「甲陽学院」の国語の教師をつとめ、教頭にもなったが、のちには京都で僧侶の仕事を継いだ。」という記述がある。村上の

母親については、「母親の村上美幸さんも、春樹が生まれる前までは国語の教師だった。」^(注)とあり、村上の作品に登場する教師の設定には、村上が教師として働く両親に育てられたことの影響があることが推察される。実際に、『猫を棄てる 父親について語るとき』(文藝春秋、二〇二〇年四月)では、父親が京都大学在学中に、徴兵で中国に渡ったことが明かされており、作中に初めて教師が登場した「中国行きのスロウ・ボート」を連想させる。したがって、村上が描く教師には少なからず教師だった両親の存在の影響があることは否定できない。ただ、柘植氏が指摘しているように、『スプートニクの恋人』が発表された当時は、村上の両親が教師であることはさほど知られていなかったという事情があり、それも主人公「ぼく」の「小学校の教師」という職業が注目されてこなかった一因であろう。

また、一九八二年四月八日、東京、夕刊の朝日新聞に掲載されている「教師という存在」と題された村上の日記には、「父親が教師をしていたせいもあって、どうも教師という存在に弱い。はなから反感を持つか照れてしまうかのどちらかである。三対一くらいで前者の方が多かった。」とある。この日記は、「三対一くらい」の「一」の方について書かれているため、前者の理由を読み取ることはできないが、村上春樹・安西水丸『村上朝日堂はいかにして鍛えられたか』(新潮社、一九九九年八月)に収録されている「体罰について」で、理不尽な理由で教師に日常的に殴られていた中学生時代を回想し、「教師や学校に対して親しみよりはむしろ、恐怖や嫌悪感の方を強く抱くようになった。」と述べている。さらに、読者とのメールのやりとりをまとめた『村上さんのところ』(新潮社、二〇一五年七月)

に掲載されている「生徒をよくするため」という一方的な大義名分のもと、かれらのプライドをへし折り、抑圧することは許されるのでしょうか。」という質問への回答の中に「僕は組織というものがあまり好きでないうえに、父親が教師をしていて、そういう「教師性」に対して強く反撥していた人間ですのう」という記述がある。ここから、村上が父親に限らず、これまでに出会ってきた教師に、「反感」や「恐怖」、「嫌悪感」を抱いていること、そして「抑圧」を強いる「教師性」への抵抗が読み取れる。

『猫を棄てる 父親について語るとき』に、両親に関する詳細な記述がある。左はその引用である。

父はもともと学問の好きな人だった。勉強をすることが生き甲斐のようなどころもあった。文学を愛好し、教師になってからもよく一人で本を読んでいた。家の中にはいつも本が溢れていた。僕が十代にして熱心な読書家になったのにも、あるいはその影響があった。

続けて、教師としての両親については

教師としては、ごく公平に見て、かなり優秀な教師であったと思う。父が亡くなったときには、とてもたくさんの教え子が集まってきてくれて、僕もその数に少なからず驚かされた。どうやらそれなりに生徒たちに慕われてはいたようだ。父の教え子には医師になった人が多く、おかげで闘病生活のあいだずいぶん丁寧に親身に面倒を見ていただくこともできた。

ちなみに母も教師としてはけっこう優秀であつたらしく、僕を産んで専業主婦になつてからも、昔の教え子たち（といっても母とはあまり年齢は変わらないのだが）がよくうちに遊びに来ていた。

と綴られており、両親ともに「優秀な教師」として村上の目に映つていたことがうかがえる。ただ、その一方で、自身の学業成績を振り返り、

（前略）父の期待に十分こたえることができなかつた。身を入れて勉強をしようという気持ちにどうしてもなれなかつたからだ。（中略）父は慢性的な不満を抱くようになり^{（注二）}、僕は慢性的な痛み（無意識的な怒りを含んだ痛みだ）^{（注三）}を感じるようになった。

とも述べている。そのような父親との軋轢も、村上の言う教師への「反感」が生じた原因の一つだと推察される。少なくとも村上にとつて、教師は「反感」を覚える存在であつたことは確かであるが、村上自身が出会つてきた教師たちと、本作品に登場する教師のあり方をそのまま重ねて読むことはできないだろう。三章では、その点を踏まえ、「小学校の教師」という職業性に着目し、その他の教員小説と比較しながら、本作品に描かれた教師像について考えたい。

三章 「ぼく」の二面性

主人公や物語の主要人物が教師に設定されている代表的な教員小説として、夏目漱石『坊つちゃん』（明治三十九年）や島崎藤村『破戒』（明治三十九年）、田山花袋『田舎教師』（明治四二年）などが挙げられる。教員小説は戦前から数多く存在し、その歴史は長い。

出木良輔「（田舎教師）の欲望をさえぎる——明治四〇年代、教育界のなかの文学——」（『日本文学』65巻9号）、日本文学協会、二〇一六年九月）に、「日本近代文学はしばしば、近代知識人のカリチュアとして学校教員を描いてきた。そしてその多くが何らかの書物、とりわけ小説や詩歌などの文学作品を読み、愛好し、時にそれらに特権的な価値を見出す人々として語られている点には注目して良い。」とある。たしかに、『坊つちゃん』に登場する「赤シャツ」は、「元来中学の教師などは社会の中流にくらいするもの^{（注三）}だからして、単に物質的の快樂ばかり求めるべきものではない。その方に耽るとついに品性にわるい影響を及ぼすようになる。しかし人間だから、何か娛樂がないと、田舎へ来て狭い土地では到底暮せるものではない。それで釣に行くとか、文学書を読むとか、または新体詩や俳句を作るとか、何でも高尚な精神的娛樂を求めなくつてはいけない……」と話しており、文学や詩、俳句を愛好する教師の姿が描かれている。同様に、『スプートニクの恋人』の主人公「ぼく」も、自身の学生時代を振り返り、「（前略）息をするのと同じくらい自然に、熱心に本を読んだ。暇があれば静かなところに座つて、いつまでも一人でページを繰つていた。日本の小説も外国の小説も、新し

いものも古いものも、前衛もベストセラーも、それがいくらかかなりとも知的な興奮をもたらしてくるものであれば、なんだって手にとって読んだ。図書館に入りびたり、神田の古本屋街に行けば、まる一日楽しく時間をつぶすことができた。」と話している。また、「小説を読むのは並はずれて好きだったけれど、あえて小説家を志すほどの文章の才能があるとは思えなかつたし、かといって編集者や批評家になるには好みも激しすぎた。小説はぼくにとつて純粹に個人的な喜びであり、勉強や仕事とは別の場所にこっそりとつとめておくべきものだった。」とあるため、『坊つちゃん』の「赤シャツ」と同じく、読書を「精神的娯楽」として捉えていることが読み取れる。したがって、「精神的娯楽」として文学を愛好しているという点において、「ぼく」は典型的な教師像に当てはまる。

さらに、主人公の年齢が若いことも多くの教員小説に共通した特徴である。先に挙げた『坊つちゃん』の主人公の年齢は明記されていないものの、中学校の教師として愛媛県松山に赴任したのは二十一歳になる年だと推定できる。『破戒』の主人公が、小学校の教員として飯山に赴任したのは二十二歳の春で、二十五歳になる年のことが、『田舎教師』は、主人公が中学校を卒業してから小学校の代用教員として働き、結核により二十一歳で亡くなるまでのことが描かれている。『スプートニクの恋人』の主人公の年齢は二十四歳^{註四}であるため、主人公の年齢が若く設定されていることも教員小説の特徴の一つとして挙げられよう。講談社文芸文庫編『戦後短篇小説再発見 1 青春の光と影』（講談社、二〇〇一年六月）に付された解説「さまざまなる『青春小説』」の中で、川村湊氏は、「青春」を「終わった後に気づくような、誰にとつても問拔けな、ピエロの

ような時期」とした上で、青春小説には「若い男女のすれ違いの恋愛や嫉妬や憎しみ」が描かれることが多いことを指摘している。さらに、「面白おかしく、楽しく、惨めで、貧しく、そして悲しい。それゆえに、『青春』は文学作品の永遠のテーマとして書き続けられるのだ。」と述べられている。若い教員が主人公に設定されている教員小説には、若さ故の葛藤や過ちが描かれることが多いため、「若い男女のすれ違いの恋愛や嫉妬や憎しみ」が描かれるという青春小説の特徴にも重なる部分があるのである。

ただ、これまで比較してきた作品は、『スプートニクの恋人』と時代が異なるため、ここからは理想とされてきた教師像の変化について見ていきたい。唐澤富太郎『唐澤富太郎著作集 第5巻 教師の歴史——教師の生活と倫理——』（ぎょうせい、一九八九年七月）の「人間形成者としての教師」では、「戦前においては、理想的人間像として二宮尊徳が掲げられ、楠木正成が挙げられ、教師はこの示された理想的人間像を目標に進むことができた。しかる現代にあつては、このような明確な像が指示されず、また教師自身がそれを打ち出すことも極めて難しくなっている。」と、戦前と戦後は「理想的人間像」の有無という点において異なると指摘されている。また、唐澤氏は「別記 新しい日本の教師像」で戦後の教師のタイプを次のように分類している。

その(一)は、教師が聖職的自覚を持つことによつて、戦前の教師のように、自己の精神的な支えを見出し、いこうとするものである。いわゆる子どもを愛し、ただそのために教育実践に熱情を燃やしている教育熱心な教師の中には、こう

した生活態度を持つている人が少なくない。

その(二)は、社会的地位の向上は、なによりも教師の団結による政治的発言力の増大によって可能であると考える人たちで、教職員組合の活動に積極的に参加して、政治的にこれを獲得しようとするいわゆる組合型教師といわれる者である。

その(三)は、自らをサラリーマン教師として認めて、ビジネス・ライクに教育を取り扱い、自己の生きがい、教職以外の私生活の領域に求めようとする者で、小市民的な生活設計を夢見るアルバイト教師、共働き教師などが多くそれである。

『スポーツニクの恋人』の主人公「ぼく」は、程度に差はあるものの、「その(一)」と「その(三)」の両方の面を持っているのではないか。綾目広治『教師像——文学に見る』(新読書社、二〇一五年一月)の「第七章 困難に立ち向かう教師たち——高度成長期前後から現代へ」より「三 イジメに遭う教師・クールな教師・熱血教師——石田衣良・飛鳥井千砂・小松江里子」に、「ところで、ずっと以前には(デモシカ)教師という呼び名があった。教師にデモなるうか、あるいは教師にシカなれないという人物が、実際に教師になった場合の呼称である。(中略)たとえばビジネスマンの世界でも、その仕事が好きで生き甲斐を感じてやっていると、人物の方が、生活のために仕方なく勤めているという人物よりはるかに少ないであろう。」と、「(デモシカ)教師」について書かれている。油布佐和子編『シリーズ 子どもと教育の社会学 ⑤』(教育教師の現在・教職の未来——あすの教師像を模索する——)(教育

出版、一九九九年八月)の「序章 教師の「がんばり」は教育を救えるか」で油布氏は、「仕事は仕事、余暇は余暇」と割り切り、自分の課題は遂行するが、それ以上のコミットはほしくないという、新しいタイプの教師が存在すること」を指摘し、「とりわけ教師の待遇改善が行われた1970年代以降には、こうした新しいタイプの教師をも大量に出現させるにいたったのである。」と述べている。したがって、『スポーツニクの恋人』が発表された年代において「新しいタイプの教師」の存在はそう珍しいものではなかったことが推察される。

ここからは、具体的な作中の描写から考察していく。「ぼく」は自身の職業を、次のように語る。長くなるが、本稿の考察において重要な箇所を引用する。

(前略) いわば消去法的なプロセス^(注五)を経て教師になることを選んだ。学校はぼくのアパートから電車で数駅離れたところにあった。その市の教育委員会にたまたまぼくの叔父がいて、小学校の教師にならないかと誘ってくれたのだ。(中略) ぼくはもともと教師になりたいと思っていたわけではなかった。でも実際に教師になってみると、この仕事に対して予想していた以上に深い敬意と愛情を抱くようになった。いや、それよりはむしろ、深い敬意と愛情を抱いている自分をたまたま発見するようになった、という方が表現としては正しいかもしれない。

ぼくは教壇に立ち、小学生にむかって世界や生命や言葉についての基本的な事実を語り、教えていたわけだが、それは

同時にまた子供たちの目や意識をとおして、ぼく自身にむかって世界や生命や言葉についての基本的な事実をあらためて語り、教えることでもあった。それはやり方次第では、新鮮で深みをもった作業になりえた。ぼくはまたクラスの生徒たちや、同僚たちや、生徒の母親たちもおおむね良好な関係を維持することができた。

教職に就くのに「消去法的なプロセスを経て」いることから、「ぼく」を「デモシカ」教師と考えることができる。またその一方で、「ぼく」が、教職に「深い敬意と愛情」を抱き、教師という職業に適性を感じている様子がうかがえる。作中で「ぼく」は、小学生から「どうして地球は四角くないのか? どうしてイカの足は10本で、8本じゃないのか?」などと質問されることを「すみれ」に語っているが、この部分が「ぼく」の言う「基本的な事実」を指すのだろう。また、5章の遠足の場面^{註5}や15章の「にんじん」の万引きに関する場面^{註6}では、いかにも教師らしく献身的に努める「ぼく」の姿が描かれている。

そして、ここで注目したいのが村上の両親が勤めていた中学校や高校ではなく、「小学校」という設定についてである。「ぼく」が「教壇に立ち、小学生にむかって世界や生命や言葉についての基本的な事実を語り、教えていた」と語っているように、教師という職業の特徴として、知識や技術の伝達がある。通常、教師の言葉は正しいとされ、改めて生徒から問われることは少ない。しかし、「ぼく」の生徒^{註7}は小学生であるため、「基本的な事実」であっても「ぼく」は改めて考え、「説明」^{註8}することになる。山崎英則・西村正

登編『MINEVA 教職講座④ 求められる教師像と教員養成——教職言論——』(ミネルヴァ書房、二〇〇一年六月)の「第6章 小学校の教諭生活の実際」より、「4 期待される教師像」に「これからの教師に求められる資質」の一つとして「向上心・探究心」が挙げられている。続けて「教師には、自ら研修することが義務づけられている。日々伸びていく児童を指導する教師には、向上心は欠かせない。学校を探究の場として位置づけ、児童に楽しく効果的に学ばせるためには、教師はつねに自分を磨くことを忘れてはならない。」と解説されており、「小学校の教師」としての「ぼく」の姿と重なる。さらに、藤原喜悅編『児童生徒理解と指導の基本——人間と教育——』(金子書房、一九八八年三月)の「2 児童の自己概念と教育」で国眼真理子氏は、小学生と教師の関係について、「小学生の場合、担任の先生は多くの子どもにとって「重要な意味ある他者」の一人であろう。その一言は、通りすがりの人の一言とは比べようもなく重い。日ごろ教師が一人一人の子どもにいかなるまなざしを向け、接しているかが、学校という場での自己意識を大きく規定するといつて過言ではない。」と分析している。また、「5 生徒指導と教師」で八野正男氏は、「小学校の生徒指導は、学校教育の諸活動の中で、基本的には、学級担任一人の手で、その基盤作りとその推進を図るよう、随時、展開される。」と述べている。ここから、「小学校の教師」は生活面の指導の割合が高いことに加え、担任が全ての科目を教えるという特徴が読み取れる。つまり、小学生にとって教師が相対化されることはないため、担任の存在と影響力は絶大である。

そのような教師という職業、とりわけ小学校の教師の特徴が、物

語の語り手でありながら自分自身の語り、「どれほどの客観的な事実」があるのかを疑い、「自分という人間存在をできるだけ客観的に把握」しようとする「ぼく」を描写する上で必要な設定だったのだと考察する。また、一章で引用した先行研究では、就職による「すみれ」の変化が指摘されていたが、「思春期半ばのある地点から」「世界に対する留保のない情熱を見いだすのは、本や音楽の中に限られていた。」と語り、「〈デモシカ〉教師」として小学校に勤め始めた「ぼく」が、教職に「深い敬意と愛情」を抱くようになったことは、就職が「ぼく」にもたらした大きな変化だと言える。

にもかかわらず、二面性を持つ「ぼく」は、特定の生徒の母親と肉体的な関係を持つこと、そのような関係を持つことは、職業倫理に反している。この矛盾は、「ぼく」が「ガールフレンド」を生徒の保護者として見ていないことを意味する。つまり、「ぼく」として彼女は「すみれ」以外の「ほかの女性たち」の一人に過ぎないのである。作中で彼女に名前が与えられていないのもそのためである。教員の性的な側面は、『スポーツニクの恋人』に限らず、先に挙げた『坊つちゃん』や『田舎教師』にも描かれているが、相手が生徒の保護者であっても、「ほかの女性たち」の一人としか見えないという「ぼく」の認識は注目に値する。

村上は、『村上さんのところ』で、「仕事が生きていだという人もいますし、仕事なんてただの必要悪だという人もいます。僕はどちらもありません。でもどちらにしても、職業倫理みたいなものはなくてはなりません。それは生きていく上でどうしても必要なものだから。それが僕の考え方です。」と発言しているが、仕事を「生きがい」とも「必要悪」とも捉える「ぼく」の教師として

の在り方にもそのような考え方が反映されている。また、作中で教師の職業性に批判的な目を向けている人物として、「中村警備主任」が挙げられる。15章で「中村警備主任」は、「ぼく」に「先生というお仕事はまったくうらやましいですよ」と切り出し、「夏休みは一ヶ月以上とれるし、日曜日には仕事に出てこなくてもいいし、夜勤もないし、付け届けはあるし。言うことないじゃありませんか。」「学校の先生がいちばんらくだからな」と述べているが、村上が教師に「反感」や「恐怖」、「嫌悪感」を抱くようになった原因を重ねることはできない。したがって、本作品には、村上自身が「強く反撥していた」「教師性」は反映されていないと言える。「ぼく」が「小学校の教師」として働く具体的な描写が少ないことを踏まえても、本作品は、教師の私生活に焦点を当てたものであると言える。だからこそ、本作品に描かれる教師像には「〈デモシカ〉教師」の側面が必要だったのである。

以上で、主人公の教師としての側面が物語にとって重要であることが明らかになった。それを踏まえ、本作品に「ぼく」と「ガールフレンド」の不倫関係が描かれた理由と、後述の「にんじん」の加筆の問題を取り上げる。そして、「にんじん」として、担任という意味において「重要な意味ある他者」である「ぼく」とその母親の肉体的な関係が「にんじん」に与えた影響と「にんじん」の万引きの一件によって生じた「ぼく」の認識の変化について考察する。

四章 「settlement」のための「にんじん」

主人公「ぼく」が「にんじん」と接する場面を分析しながら、「一応の物語が終わったあとに settlement のための存在」として「にんじん」が書き加えられたことの意味について考える。「settlement」は一般的に、解決、和解、清算の意に訳される。先述した通り、村上は、「彼はあくまで一応の物語が終わったあとに settlement のための存在である」としていることから、「すみれ」が失踪したまま「一応の物語」は終わっていることになる。では、本作品における「settlement」とは何を指すのか。

村上は、『村上春樹全作品 1990～2000②』の「解題」の中で、作品の成立事情や構成について次のように述べている。

思いつくままに書いていったので、最初はわりにシンプルな構成だったが、あとでいくつかのエピソードをつけ加えて物語の肉づけをした^(注三)。たとえばにんじんという名前の少年は最初のバージョンでほんの少ししか登場しなかった。でも何度か読み返しているうちに、この少年がもっと動かなくてはならないという気がしてきて、それで彼の物語をじわじわと膨らませていくことになった。すみれが現世的な肉を失っていくのに呼応して、にんじんが人物としての肉を身につけていくわけだ。そういう相互的なリフレクションがこの小説にとつては必要だった。

たしかに、7章から14章にかけて「すみれ」の失踪に関する描写が続き、15章以降は「にんじん」を中心とした物語が展開される。14章の終わりに、「ぼくは明日になれば飛行機に乗って東京に戻る。すぐに夏休みが終わり、限りなく続く日常の中に再び足を踏み入れていく。」とあり、15章は「日曜日の午後電話のベルが鳴った。九月の新学期が始まって二度目の日曜日だった。」という文章から始められている。つまり、「にんじんが人物としての肉を身につけていく」15章以降は、「一応の物語が終わったあとに」後日譚として綴られているのである。

「にんじん」は、「ぼく」によって次のように語られる。

本当の名前は仁村晋一というのだが、クラスではみんなには「にんじん」と呼ばれていた。やせて細面で、髪がもしやもしやとちぢれているので、本当ににんじんみたいに見えた。ぼくもだいたいはその名前で呼んでいた^(注四)。

ここから、外見の特徴を理由に、クラスメイト、そして担任の「ぼく」から「にんじん」と呼ばれていることがわかるが、ここで描写される「にんじん」の容姿は、「にんじん」と呼ばれる理由としては些か不自然に思われる。

「にんじん」というあだ名、そして彼の境遇は、ジュール・ルナールの代表作『にんじん』（一八九四年）の主人公を彷彿とさせる。岸田国士訳『にんじん』（岩波書店、一九五〇年四月）に付されている「にんじん」とルアナールについて」には、次のようにある。

ジュール・ルアナール (Jules Renard 1864—1910) の作品のうちで最もひろく読まれ、世人に親しまれているのは、「のんにんじん」である。原名は Poil de Carotte 直訳すると、「のんにん毛」、すなわち、のんじんのように赤ちゃけた髪の毛という意味になる。この種の髪の色は、ブロンドや栗色などちがいが、生々しくどぎつい感じのために、あまり見えがしないばかりでなく、一般にこの髪の色をした人間は、皮膚の艶もわるく、ソバカスが多くて、その上、性質まで人好きのしないところがあるように思われているのである。

この作品の主人公の少年は、「のんじんのように赤ちゃけた髪の色」を理由に「のんにん」と呼ばれ、そこには「性質まで人好きのしないところがある」という意味が含まれているのである。したがって、容姿の特徴によつて「のんにん」と呼ばれるという共通点はあるが、両者の間に明確な関連性は確認できない。しかし、村上春樹・安西水丸『村上朝日堂』(新潮社、一九八七年二月)の「本の話⁽³⁾」ついで本を買うことについて「で村上は、「当時(一九六〇年代前半)僕の家は毎月河出書房の『世界文学全集』と中央公論社の『世界の歴史』を一冊ずつ書店に配達してもらっていて、僕はそれを一冊一冊読みあげながら十代を送った。おかげで僕の読書範囲は今に至るまで外国文学一本槍である。要するに三ツ子の魂百までというか、最初のめぐりあわせとか環境とかで、人の好みというのはいたい決定されてしまうのである。」と述べている。また、『夢を見るたびに毎朝僕は目覚めるのです 村上春樹インタビュー集1997—2011』(文藝春秋、二〇一二年九月)に収録されている「何

かを人に呑み込ませようとするとき、あなたはとびつきり親切にならなくてはならない」(『THE PARIS REVIEW』2004年夏号)で、「子どもの頃にはあまり日本の小説を読まなかったし、十代のときにもほとんど読みませんでした。できるだけ日本の文化から遠ざかりたいというふうに、ずっと思っていたから。」(僕は西欧の文化にどんだん引き寄せられていった。)と述べている。^(註五)村上が過去にルナールの『のんにん』を読んでいたと断定することはできないが、そのような読書遍歴があり、翻訳家としても活動する村上がルナールの『のんにん』を読んだ経験がないとは考え難い。加えて、「うちの書棚から」(『BRUTUS』マガジンハウス、二〇二一年一〇月)で村上が、「小説を書き始めたときに役に立ったのは、そしてその後もずっと役に立ち続けたのは、それまでに浴びるように読んできた様々な本の「記憶」の集積だった。それは巨大な深い貯水池のようなもので、僕は必要に応じてそこから自分のために水を汲んでくることができた。もしそのような集積が存在しなかったら、今までこうして小説を書き続けることはとてもできなかったら、今までこうして小説を書き続けることはとてもできなかったら、今までこうして小説を書き続けることはとてもできなかったら。」と語っていることから、村上が「浴びるように読んできた様々な本」の一冊におそらく含まれるであろう『のんにん』から「のんにん」(仁村晋一)の着想を得た可能性は否定できない。先に引用した「のんにん」とルアナールについて「で岸田氏は次のように続けている。

自分の子供にこんな渾名をつける母親、そして、その渾名が平気で通用している家族というものを想像すると、それだけでもう暗澹たる気持ちに誘われるが、いったい、ルアナールは、

どういうつもりでこの作品を書いたのだろう。

言うまでもなく、彼は、自分の少年時代の苦い追憶を、ことに、異常な性格をもつ母親と、その母親をどうしても愛することのできなかった、そして、その要因は母親のほうばかりにあるのではないことを知らなかった自分との、宿命的な対立を、いくぶん皮肉をまじえて、淡々と、ユウモラスに書いてみたかったのである。

彼の日記^(註七)によると、この「にんじん」の内容がだいたい事実に基づいたものであることはわかるが、この作品を必ずしも彼の自伝の一部として見るのはあたらなと思う。

つまり、『にんじん』は母親による精神虐待の物語として捉えることができる。そしてそれは、程度に差はあるものの、『スポーツニクの恋人』の「にんじん」とその母親の関係にも言えないだろうか。『スポーツニクの恋人』における「にんじん」は「ぼく」によつて、次のように語られる。

おとなしくて、必要以上に口をきかない子供だった。成績は良いほうだし、宿題も忘れないし、掃除当番をすつぽかしたりもしない。問題も起こさない。しかし授業で手をあげて発言することはまずないし、リーダーシップをとることもない。きらわれてもいないが、とくに人気があるわけでもない。母親はそのことを少なからず不満に思っていたが、教師からすれば、まずは上出来な子供だった。

ここから、母親と「にんじん」の関係が良好ではないことがわかる^(註八)。そして、万引きの一件によつて、「上出来な子供」として「ぼく」の目に映っていた「にんじん」の「問題」が露呈したと判断できる^(註九)。「にんじん」が盗んだのは、時系列順に「シャーペンシル15本」、「コンパスを8個」、「ホッチキス8個」で、最終的に「保管庫の鍵」をも対象としていることから、「にんじん」の常習的な万引きに、大人の関心を引く意図があったことは明白である。実際に、「ぼく」は「常習的な万引きという行為は、とくに子供の場合、犯罪性よりは精神的な微妙な歪みから来ているものであることが多いです。もちろんぼくがもう少し注意深く観察していればわかることがあったかもしれませんが、それについては反省します。しかしそういう歪みは、外見からはなかなか予測しにくいものなんです」と話している。よつて、ルナールの『にんじん』と同じあだ名で呼ばれる少年をあえて登場させることで、「にんじん」の外見の特徴ではなく、母親と「にんじん」の不和の表現を試みたのだと考察する。

また、「ぼく」は「にんじん」に対して、問題を起こさない「上出来な子供」という印象を持っていたが、「にんじん」の万引きを知つてからはその認識に変化が見られる。「ぼく」は、

不思議な子供だ——学校で顔をあわせるたびにあらためてそう思った。そう思わないわけにはいかなかった。そのほつりとした穏やかな顔つきの奥に、いったいどんな思いが潜んでいるのか、ぼくにはうまく推しはかることができなかった。でも彼が頭の中でいろんなことを思いめぐらせているのはた

しかだった。そして必要とあればそれを素早く的確に実行にうつすだけの行動力が、その子供の中にはあった。そこには深みのようなものさえ感じられた。

としており、「にんじん」が「ぼく」と母親の關係に気づいていたこと、それによって深く傷ついていたことが暗示されている。さらに、

あの日の午後喫茶店で、心に抱いている思いを彼に正直に話したのは、たぶん良いことだったのだろうとぼくは思った。彼にとつても、ぼくにとつても。どちらかといえば、むしろぼくにとつて。彼は——考えてみれば変な話だけれど——そのときにぼくを理解し、受け入れてくれたのだ。赦してさえくれたのだ。ある程度。

とあるが、「にんじん」が「赦してさえくれた」のは、「ぼく」と母親の關係のことであろう。そして「ぼく」は、「ガールフレンド」との關係を絶つことを決意し、「そこに存在した彼ら」、つまり「にんじん」と「ガールフレンド」ではなく「不在するすみれのことだけ」を考えられるようになったのである。

したがって、万引きという問題行動を起こす「にんじん」の加筆は、「すみれとのあいだに性的な緊張を介在させ」ないために自身より「年上で、夫なり既婚者なり決まった恋人なりが」いる女性たちと「肉体的な關係」を持つてきた「ぼく」が、肉体的な關係にあつた「すみれ」以外の「ほかの女性たち」の一人としてではなく、自身の生徒の保護者つまり、彼女を「にんじん」の母親として認識し

直させるためになされたものであると考察する。15章の冒頭で、「ぼく」が「ガールフレンド」を「受け持ちの生徒の母親」と、後半で「彼女」と表現しているのも認識の変化の現れだろう。つまり、『スプートニクの恋人』における「settlement」とは、「ガールフレンド」との不倫關係によつて「にんじん」を傷つけていることを自覚した「ぼく」が、認識を改め、不倫關係を絶つに至つたこと、それによつて「すみれ」の歸りを待つ資格を得た「ぼく」が、「すみれ」を失つてもなお生き続けていくことを指す。本作品の「settlement」のためには「にんじん」という存在が必要で、「すみれ」の失踪の後日譚として語られる15章以降で加筆されたことに重要な意味を持つのである。

結論

本稿では、主人公「ぼく」の「小学校の教師」という職業が見過ごされてきたことを、『スプートニクの恋人』の研究史上の問題点として指摘した。「ロングインタビュー」物語はいつも自発的でないければならない。「広告批評」マドラ出版、一九九九年一〇月や『村上春樹全作品 1990～2000②』の「解題」で村上は、この作品についての見解を述べており、作品の冒頭に見られる「比喩的氾濫」といった自身の文章の特徴を出し尽くすことや「小説的視点の問題」への試みがなされた「テクニク・コンシャスな作品」として位置づけられてきた作品である。先行研究の多くはそれらの問題について取り上げており、「ぼく」の職業については問題とされていない。

本稿では、その点について批判的に検討した上で、村上によって語られた内容ではなく、むしろ語られなかった内容に着目した。そのような問題意識のもと、教員小説の視点から読みの可能性について考察してきた。

作品が発表された当時は、村上の両親や生い立ちについて今ほど明かされていなかったが、『猫を棄てる 父親について語るとき』(文藝春秋、二〇二〇年四月)が出版されたこともあり、現在はその資料を多く確認できる。村上と教師として働く両親、とりわけ父親との間には軋轢があり、村上にとつての教師は、「抑圧」を強いるというその「教師性」のために、「反感」や「嫌悪感」を持たざるを得ない存在であった。しかし、この作品に描かれた「小学校の教師」として働く「ぼく」の姿や「中村警備主任」の言葉に、そのような「教師性」、それに対する抵抗は見られなかった。

また、代表的な教員小説と比較し、理想とされる教師像の変遷を追うことで、「ぼく」の教師像が明らかとなった。自分自身の語り「どれほどの客観的な事実」があるのかを疑い、「自分という人間存在をできるだけ客観的に把握」しようとする「ぼく」の職業を「小学校の教師」に設定することにより、必然と「ぼく」は「基本的な事実」について考え、語り直すことを迫られる。そのような「新鮮で深みをもった作業」を繰り返すことで、「ぼく」は教職に「深い敬意と愛情」を抱くようになり、本作品の「settlement」につながったのである。作中で言葉を発することのない、つまり、言葉を与えられていない「にんじん」が「settlementのための存在」として必要とされたのも「ぼく」の職業性と深く関わっている。「世界に対する留保のない情熱を見いだすのは、本や音楽の中に限られてい

た。」と語り、「(デモシカ)教師」として教職に就いた「ぼく」であったが、教職に「深い敬意と愛情」を持つようになるという変化が見られた。これは、就職が引き起こした「ぼく」の内面の変化である。そのような「ぼく」の姿から教職への適性を感じられる一方で、「ぼく」は担任をしている生徒「にんじん」の母親「ガールフレンド」と「肉体的な関係」を持っている。ただ、油布氏の言う「新しい教師」としての側面を持つ「ぼく」にとつて、それが職業倫理に反するという意識は希薄なため、教員の性的な側面が描かれるという教員小説としての系譜を継ぎつつも、不倫関係にある「ガールフレンド」を、生徒の保護者としてではなく過去にそのような関係にあった「ほかの女性たち」の一人としか認識していないところに、「(デモシカ)教師」としての「ぼく」の恋愛観が読み取れ、教師の私生活に光が当てられているところが本作品の大きな特徴であった。そして、「ぼく」と「ガールフレンド」の「肉体的な関係」からの脱却は、教員小説や青春小説に描かれる性の枠を超え、大きな意味を持つ。「一応の物語が終わったあとのsettlementのための存在」として、加筆された「にんじん」の万引きの一件により、「ガールフレンド」を「受け持ちの生徒の母親」、保護者として認識させられ、関係を絶つことを決めたことで、「ぼく」は「すみれ」の帰りを待つ資格が得られたのである。それが「一応の物語が終わったあとのsettlement」であり、そこには「にんじん」の加筆が必要だったのである。

本稿では、「小学校の教師」における職業性を分析した上で「ぼく」と「にんじん」の関係を明らかにし、ルナールの『にんじん』から着想を得た可能性を考察した。その結果、この作品の「settlement」

と「にんじん」が加筆された理由を導き出すことができた。したがって、『スプートニクの恋人』は、作品の冒頭に見られる「比喩の氾濫」といった村上の文章の特徴や「小説的視点の問題」に加え、「小学校の教師」という「ぼく」の職業に着目し、これまでになかった教員小説の視点から検討されるべきである。そのような新たな位置づけの可能性と研究の展望を提言し、本稿を終える。

注

- (注一) 『村上春樹全作品 1990～2000②』(講談社、二〇〇三年一月)に掲載されている「解題」で、村上自身によってどのように分類されている。
- (注二) 「立ち話風哲学問答(11)」「(広告批評(230))」マドラ出版、一九九九年九月)で多田道太郎氏は、「安心してよい骨董をいじっているよう」だとしつつ、「いまの日本の散文で、これだけの魅力のある、安心できる文章を書ける人というの、どの世代を見渡してもいない。」と、ある程度の評価をしている。
- (注三) 「22歳の春にすみれは生まれて初めて恋に落ちた。広大な平原をまっすぐ突き進む竜巻のような激しい恋だった。それは行く手のかたちあるものを残らずなぎ倒し、片端から空に巻き上げ、理不尽に引きちぎり、完膚なきまでに叩きつぶした。そして勢いをひとつまみもゆるめることなく大洋を吹きわたり、アンコールワットを無慈悲に崩し、インド

の森を気の毒な一群の虎ごと熱で焼きつくし、ペルシャの砂漠の砂嵐となつてどこかのエキゾチックな城塞都市をまるとひとつ砂に埋もれさせてしまった。みごとに記念碑的な恋だった。恋に落ちた相手はすみれより17歳年上で、結婚していた。さらにつけ加えるなら、女性だった。それがすべてのものごとが始まった場所であり、(ほとんど)すべてのものごとが終わった場所だった。」という箇所を指す。

- (注四) 物語の語り手。大学時代に出会った「すみれ」に思いを寄せている。
- (注五) 小説家を目指す女性。従姉の結婚式で「ミュウ」に出会い、恋に落ちる。
- (注六) 日本で生まれ育った韓国籍の既婚女性。
- (注七) 本名は仁村晋一。15章の万引きの場面までほとんど登場しない。
- (注八) 主人公「ぼく」は自身の職業を、「小学校の先生」(2章)、「小学校の教師」(5章)と表現している。「すみれ」と「ガールフレンド」と「中村警備主任」はいずれも「先生」という呼称を用いている。『日本国語大辞典 第二版』(小学館、二〇〇〇年)によれば、「先生」は、「相手とする師や、教員、医師、議員などを尊敬して呼ぶ語。」として用いられる一方で「からかうような気持で、他人をあなどつていう語。」として用いられる場合がある。実際に、「警備員」が発する「先生」という言葉に「ぼく」は「侮辱的な」印象を受けている(15章)。「教師」は「学校などで、学業を教える人。学術、

技芸などを教授する人。師匠。教員。先生。」の意がある。

また、「教員」や「教諭」という呼称も一般的だが、『日本国語大辞典 第二版』では、「教員」は「学校で教育職務に従事する人。特に学校の教授、助教授、講師、助手、教諭、助教諭、養護教諭および養護助教諭の総称。また、学校の学長、校長および各種学校の教職員を含むこともある。教育職員。教師。先生。」「教諭」は「教育職員免許法による普通免許状を持ち、学校教育に携わる者。小・中・高等学校、養護・ろう・盲学校および幼稚園の正教員。旧制では、中等学校の正規の教員をいった。」と解説されており、「先生」と「教師」に比べ、教員免許を持ち、学校教育に従事するという点において意味が限定されることがわかる。本稿では、作中の表記に従い、「ぼく」の職業を「小学校の教師」という表現で統一する。なお、三章で論じる「教員小説」の主人公はいずれも「学校で教育職務に従事」しているため、「教員」の表記を用いた。

(注九)

先に引用した通り、『村上春樹全作品 1980～2000②』の「解題」に「『ぼく』はもちろん語り手であり、そういう意味では基本的にこの話は、これまで僕が書いてきたのと同じような一人称の小説ということになるわけだが、僕としては今回はムービーカメラを後ろに引くみたいに、「ぼく」の視点をどんどん後ろに引いていって、「ぼく」とすみれとミユウという三人の視点をほとんど対等に、あるときには独立しあるときには有機的に絡み合いながら機能する物語」を書くように試みたという記述があるように、この作品

はあくまでも「『ぼく』の視点」によって展開されているため、本稿では「『ぼく』を主人公とする。

(注一〇) 両親や自身の生い立ちについて書かれた『猫を棄てる 父親について語るとき』(文藝春秋、二〇二〇年四月二十五日)に、「現在九十六歳で存命の母も国語教師で、大阪の樟蔭女子専門学校国文科を出て、母校(たぶん樟蔭高等女学校だと思う)で教えていたということだが、結婚を機に職を辞した。」とある。

(注一一) 『職業としての小説家』(株式会社スイッチ・パブリッシング、二〇一五年九月)の「第八回 学校について」に、「学校に通っている間、よく両親から、あるいは先生から「学校にいる間にかくしつかり勉強をしておきなさい。若いうちにもっと身を入れて学んでおけばよかったと、大人になってから必ず後悔するから」と忠告され」たとある。

(注一二) 『村上さんのところ』(新潮社、二〇一五年七月)の中で、「親にどうして欲しいと思われませんか?」という質問に「子供への親の期待が大きいと、子供には負担になります。むしろ親が自分自身に期待するようになれば、子供もまねをして自分自身に期待するようになるのではないのでしょうか? 親がまず自分を磨かなくては、と僕は思います。単なる私見に過ぎませんが。」と述べている。

(注一三) 『唐澤富太郎著作集 第5巻 教師の歴史——教師の生活と倫理——』(ぎょうせい、一九八九年七月)の「I 近代学校の成立と教師」には、明治初期の教師は、「寺子屋師匠の延長として威厳をもち、社会人からは尊敬されてい

た。」とある。しかし、「VI 教員の生活難と職業人化」には、大正期は「第一次世界大戦の結果、いよいよ教員は経済的悲境に陥った。」「このような状態のもとに教師は急速に自己の職業に対する自尊心を失い、また世人もこれを尊敬しなくなったのである。」とあり、教員の社会的地位の低下が読み取れる。

(注一四) 「ぼく」は作中で二十五歳を迎える。

(注一五) 「ぼく」は大学時代を振り返り、専攻していた歴史学に身を捧げようとも思えず、一般の会社に就職口を見つけようという気持ちも起きなかったとしている。

(注一六) 「ぼく」は、弁当を忘れた二人の生徒に自分の弁当を分け与え、「もう歩けないと言いつつ」た女の子を背負い、頭を打った生徒の対応に追われたとある。

(注一七) 「ぼく」は、「教師として言わせていただければ」と切り出し、「中村警備主任」に話し合いの重要性を説く。

(注一八) 作中で「ぼく」は「児童」ではなく、「生徒」という表現を用いている。『日本語大辞典 第二版』(小学館、二〇〇〇年)では、「児童」は「心身ともまだ十分に発達していない者。こども。わらべ。童児。現在は、特に小学校に学んでいる子どもをいう。学童。」「生徒」は「学校などで教えを受ける人。現在はふつう、大学の学生や小学校の児童に対し、高等学校・中学校で教育を受ける者をいう。」とある。村上の両親は中学校と高校の教員であるため、「児童」という呼び方に馴染みがなかったために、「児童」ではなく「生徒」が採用されたのだと推察する。

(注一九) 「すみれ」に「いつも思うんだけど、あなたはものごとを説明するのが上手ね」と言われた「ぼく」は、「それがぼくの仕事なんだよ」と話している。

(注二〇) 「赤シャツ」は「山嵐」によって、「あいつは、ふた言目には品性だの、精神的娯楽だのと云う癖に、裏へ廻って、芸者と関係なんかつけとる、怪しからん奴だ。」と評される。

(注二一) 「清三」は、「張見世」に通い借金を作る。

(注二二) 「にんじん」が万引きしたスパーマーケットの警備員。「長く現場の警察官をしてい」たと自身の経歴を語る。「ぼく」は、「ずんぐりとした体格の男で、年齢は五十代後半に見えた。腕が太く、頭が大きく、白髪のまじった髪は密生して硬く、安っぽい匂いのする整髪料で無理に押さえつけられている。」と、その印象を述べている。

(注二三) 村上は、「ロングインタビュー 物語はいつも自発的でなければならぬ」(「広告批評」、マドラ出版、一九九九年一〇月)の中で、「僕は徹底的に書き直します。『スポーツニクの恋人』だって、書き上げてから一年以上かけて、何十回か書き直している。」と話している。

(注二四) 東京都教育委員会(二〇二二年六月二日)「令和4年度東京都教職課程学生ハンドブック」より、「Ⅲ 教員になりたいと思っている人に学んでほしいこと」、URL: [handbook06.pdf \(tokyo-18.jp\)](http://handbook06.pdf(tokyo-18.jp))。(参照日:二〇二二年一〇月二十日)に、「一人一人の児童・生徒はかけがえのない存在であり、人格を尊重するという趣旨から、名前を呼ぶときは、あだ名や呼び捨てにせず敬称を付けて呼ぶことが大切

です。」と明記されている。今日において、そのような考え方は定着しているように思われるが、作品が発表された当時は、教師が生徒を渾名で呼ぶことは珍しくなかったことがうかがえる。

(注二五) 村上は、『若い読者のための短編小説案内』(文藝春秋、一九九七年一〇月)の「まずはじめに」で、「(前略)まったく日本の文学を読まなかったというわけでもなくて、とくにふれて——たとえばそうする必要に迫られたり、誰かに強く勧められたり、あるいはほかに読むものが手元になようなおりに——手には取ったのですが、その数は僕の読んだ海外の小説に比べるときわめて少ないもの」だったと述べている。

(注二六) 『スプートニクの恋人』については、「ロングインタビュー物語はいつも自発的でなければならぬ」で、「そう言えば、観覧車の話はああいう事故が本当にあつて、ずっと前に新聞で読んだ記事が記憶のどこかに残っていた。僕らみたいな仕事をしていると、そういう抽斗がいつぱいあるんですよ。」と語っている。

(注二七) ルナールの死後に発表された『ルナール日記』のこと。岸田氏によって翻訳されている。

(注二八) 「にんじん」の母親も「わたしはあの子といたい何を話せばいいのか、わからなくなることがあるのよ。」と話している。

(注二九) 藤原喜悅編『児童生徒理解と指導の基本——人間と教育——』の「4 発達障害へのかかわりを通して」で上野一

彦氏は、問題児について、「なぜ、そうした行動を起こすのだろうかと考えるとき、ひよつとすると、その問題児とされる子どもは、私たちに解決すべき大切な問題を課題として提起している子どもではないかと思う。つまり、問題児とは、困った問題を引き起こす子どもではなく、私たちに大切な問題を投げかけている子どもなのである。」と述べている。

(注三〇) 「にんじん」の母親も自身と「ぼく」の性的な関係について、「あの子は何か感じているのかしら?」、「けっこう勘の良い子だし」と「ぼく」に話している。

引用・参考文献

- ・『スプートニクの恋人』(講談社、一九九九年四月)
- ・「立ち話風哲学問答(11)」「(2)広告批評(230)」、マドラ出版、一九九九年九月)
- ・『村上春樹全作品 1990～2000②』(講談社、二〇〇三年一月)
- ・柘植光彦『村上春樹の秘密 ゼロからわかる作品と人生』(株式会社アスキー・メディアワークス、二〇一〇年四月)
- ・加藤典洋編『村上春樹 イエローページ PART2』(荒地出版社、二〇〇四年五月)
- ・『日本国語大辞典 第二版』(小学館、二〇〇〇年)
- ・『ノルウェイの森』(講談社、一九八七年九月)
- ・『ダンス・ダンス・ダンス』(講談社、一九八八年一〇月)

- ・『国境の南、太陽の西』（講談社、一九九二年一〇月）
- ・『中国行きのスロウ・ボート』（『海』、中央公論社、一九八〇年四月）
- ・『リーダーホーゼン』（『回転木馬のデッド・ヒート』（講談社、一九八五年一〇月）
- ・『雨の日の女#241#242』（『E』、アド・プロラーズハウス、一九八七年）
- ・『ねじまき鳥クロニクル』（新潮社、一九九四年四月）
- ・『海辺のカフカ』（新潮社、二〇〇二年九月）
- ・『1Q84』（新潮社、二〇〇九年五月）
- ・『蟹』（『めくらやなぎと眠る女』、新潮社、二〇〇九年一月）
- ・『シエラザード』（『MONKEY』vol.2 SPRING 2014（スイッチ・パブリッシング、二〇一四年二月）
- ・今井清人「村上春樹の音楽VI——『スポーツニクの恋人』について」（『専修総合科学研究28』、二〇二〇年一〇月二〇日）
- ・範淑文「主人公が演じた「働く」という行為——夏目漱石『門』・村上春樹『スポーツニクの恋人』をめぐって」（『比較日本学教育研究センター研究年報 第13号』、二〇一七年三月一六日）
- ・杉山裕紀「村上春樹『スポーツニクの恋人』論——こちら／あちらの問題を軸として」（『歴史文化社会論講座紀要2017』、14、二〇一七年二月二八日）
- ・『猫を棄てる 父親について語るとき』（『文藝春秋』、二〇二〇年四月）
- ・『教師という存在』（『朝日新聞』、一九八二年四月八日、東京、夕刊）
- ・村上春樹・安西水丸『村上朝日堂はいかにして鍛えられたか』（新潮社、一九九九年八月）
- ・『村上さんのところ』（新潮社、二〇一五年七月）
- ・『職業としての小説家』（株式会社スイッチ・パブリッシング、二〇一五年九月）
- ・夏目漱石『坊っちゃん』（明治三九年）
- ・島崎藤村『破戒』（明治三九年）
- ・田山花袋『田舎教師』（明治四二年）
- ・出木良輔「〔田舎教師〕の欲望をさえぎる——明治四〇年代、教育界のなかの文学——」（『日本文学65巻9号』、日本文学協会、二〇一六年九月）
- ・唐澤富太郎『唐澤富太郎著作集 第5巻 教師の歴史——教師の生活と倫理——』（ぎょうせい、一九八九年七月）
- ・講談社文芸文庫編『戦後短篇小説再発見 1 青春の光と影』（講談社、二〇〇一年六月）
- ・綾目広治『教師像——文学に見る』（新読書社、二〇一五年一一月）
- ・油布佐和子編『シリーズ 子どもと教育の社会学 ⑤ 教師の現在・教職の未来——あすの教師像を模索する——』（教育出版、一九九九年八月）
- ・山崎英則・西村正登編『MINERVA 教職講座⑭ 求められる教師像と教員養成——教職言論——』（ミネルヴァ書房、二〇〇一年六月）
- ・藤原喜悦編『児童生徒理解と指導の基本——人間と教育——』（金子書房、一九八八年三月）
- ・『ロングインタビュー 物語はいつも自発的でなければならぬ』（『広告批評』、マドラ出版、一九九九年一〇月）
- ・東京都教育委員会（二〇二二年六月二日）「令和4年度東京都教

職課程学生ハンドブック」より、「Ⅲ 教員になりたいと思っ
ている人に学んでほしいこと」、URL: handbook06.pdf (tokyo.
lg.jp)

- ・岸田国土訳『にんじん』(岩波書店、一九五〇年四月)
- ・村上春樹・安西水丸『村上朝日堂』(新潮社、一九八七年二月)
- ・『夢を見るたびに毎朝僕は目覚めるのです 村上春樹インタ
ビュー集1997-2011』(文藝春秋、二〇一二年九月)
- ・『若い読者のための短編小説案内』(文藝春秋、一九九七年一〇月)
- ・「うちの書棚から」(「BRUTUS」マガジンハウス、二〇一二年
一〇月)

受領日: 二〇二二年一〇月二六日

改定日: 二〇二二年一月二五日

受理日: 二〇二二年二月二日